資　料

ディックス, D.L. の生涯とその業績－Ⅰ
－生い立ちからライフワークに出会うまで－

The life and work of Dorothea Lynde Dix

栗栖 瑛子

Eiko Kurisu

キーワード：ディックス, D.L.，ディックスの生涯とその業績，アメリカの精神医療，
精神障害者の権利擁護
Key words : Dorothea Lynde Dix，The life and work of Dorothea Lynde Dix,
The psychiatric treatment in the United States，Advocate for mental health care

Ⅰ．はじめに

ディックス（Dorothea Lynde Dix, 1802. 4. 4-1887. 6. 17、以下ディックス, D.L.と略）をご存知ですか？ディックス, D.L.の名前を知っている人は、今では数少なくなっているのではないでしょうか。

彼女の生きた時代は、日本では江戸末期の享和2年から明治20年に当ります。明治維新が終わり、近代日本の諸制度が作られ始め、伊藤博文が初代総理大臣となった（1885）時代です。

ディックス, D.L.は、精神医療や看護史あるいは精神看護史上、19世紀初頭に現れた「アメリカのピネル」とも呼ばれ、精神障害に苦しみ貧しく非人道的な扱いを受けていた人々の権利擁護と医療や福祉の処遇改善に尽力した先駆的改革者の一人です。

わが国では、戦前、齋藤（1928）や冷泉（1932）らが、また戦後は、鈴木（1956）、浦野（1975）、逸見（1976）らが彼女の業績を簡単に紹介していますが、彼女の生い立ちやその人となり、詳しい業績などまでは紹介されていませんでした。母国のアメリカにおいてすら、彼女の伝記は数多くなく、まして彼女自身の筆になる自伝はありません。謎の多い長い間忘れ去られていた女性です。

「なぜ世界的に活躍した有名な彼女の伝記や記録がなかったのか」という疑問はずっと私の頭から離れませんでした。

この時代に看護の先駆的人物といえば、言うまでもなく誰もが知っているフローレンス・ナイチンゲール（Florence Nightingale, 1820-1910）です。ディックス, D.L.のほうが18歳年上ですが、活躍する国や地域は異なってもいわば同時代を生き、お互いを知る機会もあったはずです。この二人はお互いをどのように見ていたのでしょうか？

受付日 2013年1月15日　受理日 2013年2月14日
佐久大学大学院看護学研究科　The Graduate School of Saku University School of Nursing Science

また、公的な学校教育が十分に確立されていなかった19世紀初めの先駆的女性たちは、どのようにして自らの知的教養を高め、能力を培っていったのでしょうか？さまざまな疑問が湧いてきます。

最近、徳永（2011）は、ナイチンゲール, F.も自らの知的教養を高め能力を培うことに苦労をしていたことに触れています。

1963年のケネディ, J.F.の「精神病および精神薄弱に関する大統領教書（Special Message to Congress On Mental Illness and Mental Retardation「ケネディ教書」）の発表と精神薄弱施設および地域精神保健センター法（Mental Retardation Facilities and Community Mental Health Act）の制定によって、アメリカの精神医療は入院医療から地域医療へと大きく舵を切りました。このことは、欧米先進諸国の精神障害者に対する医療と福祉の方向をも変え、多くの国々が病院中心の医療から地域ケアへと大きく変化してきています。この変化はわが国においても例外ではありません。この流れの中で、かつてディックス, D.L.が心血を注いで建設に奔走した州立精神病院は次々と閉鎖され、彼女の業績も人々の記憶から消えようとしています。（http://www.dixmontstatehospital.com/）

彼女の記憶がわれわれの頭から全く消え去らないうちに、ディックス, D.L.の人となりと業績を多少なりとも記し、日本に紹介しておく必要があるのではないかと考えたのが、本稿執筆の動機です。

先にも述べたように、ディックス, D.L.の自伝を含めて紹介された著作もほとんど公表されていなかった第一の理由は、彼女自身が多くの友人知人の勧めにもかかわらず、生前から自伝を書くことを固辞し、しかも自分の手紙や文書を後年利用されることを恐れて、生前に破棄するようにしたためであるといわれています。

この辺の事情をGollaher, D.（1995）は、マーシャル（Marshall, H.E）が学術的な立場からディックス, D.L.の伝記を書こうとした際に、すべての資料を管理している遺言執行人のラム（Lamb）家の拒否にあって原資料を見ることができず、伝記の執筆を断念したこともあった、と述べています。また、後年、正確な年はわかりませんが、ラム家がハーバード大学のホートン（Houghton）図書館にディックス, D.L.の手紙、日記、講演原稿、メモなどや彼女自身の刺繍作品などの原資料を寄贈して、ようやく利用が可能になったのだ、という経緯を述べています（Wilson, D.C, 1975 が“Stranger and Traveler－The Story of Dorothea Lynde Dix”の中で、資料の出典をHoughton Library, Harvard大学, Cambridge, Massachusettsとしていることから考えあわせると、原資料の寄贈は1975年以前と思われる）。

なぜこのようにしてまで彼女は自分の業績や足跡を消し去りたいと思ったのでしょうか。単純に考えれば、ディックス, D.L.は、名声を鼻にかける人ではなく、謙虚で控えめな奥ゆかしい人柄の持ち主であったからだと考えることができます。確かにそのような側面があったであろうことは想像できますが、本当にそれだけだったのでしょうか？　筆者には、ディックス, D.L.にはもっと複雑なこころの謎が秘められていたように思え、それが第二の理由ではなかったのかと考えられるのです。できればこの謎を本稿を通して、すこしでも明らかにできればと思います。

表1は、当時としては長命だった85歳の彼女の生涯を年表として、纏めたものです。

そこで、彼女の生涯を１）家族、２）少女時代（誕生から12歳まで）、３）教師時代（14歳から39歳）、４）精神障害者の代弁者として処遇改善運動に活躍した時代（41歳から79歳）、５）南北戦争の連邦軍看護婦監督の時代（59歳から63歳まで）、６）晩年、７）その後、に分けて述べることにしたいと

思います。

本稿では、家族のことから教師時代までを述べ、精神障害者の代弁者として処遇改善運動に活躍した39歳以降は別稿に譲ります。

資料は主にWilson, D.C.（1975）、Schleicher, E.（1992）、Gollaher, D.I.（1995）、Muckenhoupt, M.（2003）、Colman, P.（2007）の伝記を参考にしました。

Ⅱ．家族とその生い立ち

１）家族

（1）父方祖父：Elijah Dix

1747年8月24日マサチューセッツ州ウオタートンに生まれ、1809年6月7日、所有地の見回りをしている時に待ち伏せしていた何者かに刺され、61歳で不慮の死を遂げました。

彼は、アメリカへの入植者の多くの人々がそうであったように、健康だが大家族の中に生まれたため、経済的にはあまり恵まれず、刻苦勉励して大学卒の資格を得ようとしましたが目的を達成することはできませんでした。そこで、著名な開業医グリーン（John Green）の元で3年間修行した後、ボストンの薬剤師グリーンリーフ（William Greenleaf）に2年間弟子入りし、1770年23歳で内科・外科医の資格を取り開業しました。身体強健で誇り高く、勇気と自信に満ち、精力的な野心家で、正直、不屈の精神の持ち主である一方、短気で独裁的な人であったといわれています。彼は医師であると同時に実業家としての才能もあり、先見の明があり、町の刑務所・学校の建設や当時開拓を阻む厄介な代物としか考えられていなかった原野の樹木を街路樹として植え町の景観を良くしようとしたことなど公共心に富んだ人でした。さらに自由交易や社会的交流を図ることにも熱心で、その代表例がウオーセスターボストン間（Worcester－Boston）の有料道路をはじめて開設した人でもあり、なかなかのアイデアマンだったことが想像されます。独立戦争（1775-1783）末期に英国にわたり、ガーディナー（Gardiner）博士と提携し、帰国後書籍と外科器具・薬剤などの輸入業をはじめています。ディックス, D.L.が生まれる7年前（1785）にハンプデン（Hampden）に移り住み、ディックス邸と呼ばれる大きな邸宅を構え、薬局を開くとともに南ボストンに硫黄・樟脳の精製工場の建設、メイン州に20,000エーカーの土地を購入し、Dixmont、Dixfieldとよばれる新興住宅地の開発を手がけようとするなど、事業家としても成功した人物でした。しかし、彼の公共心と独善的なやり方には反対者も多く、個人的に暴力を振るわれたり、町から出てゆくように脅されたりしたこともあったようで、それがボストンに転居した理由の一つであったようです。Elijah Dixは自分の所有地の見回りをよくしていました。1809年6月7日何者かによって冷酷にも殺されたといわれています。19世紀の歴史家によると、無断居住者や偽善的な契約者債権者たちが共謀して犯行に及んだという説もあるようです（Gallaher, 1995）。Dixmontセンターに埋葬されました。

ディックス, D.L.は、この父方祖父から大変可愛がられ、祖父は彼女を連れてよく土地の見回りに出かけていました。「疾駆する四輪馬車で土地の見回りに祖父と出かけた時の楽しかった思い出や祖父の成功話を聞くことは、私の幼少期の明るく暖かい幸せな時であった」と回想しています。後に彼女が唯一自分の名前をつけることを認めたペンシルバニア州立Dismont精神病院（後にTrenton精神病院と改称）は、Dixmontの開発者であった祖父に捧げられたのだといわれています。

ディックス, D.L.が生まれたハンプデンは、Dixmontから32キロほど離れ、Elijah Dixは息子のJosephにこれらの土地の管理をまかせようと考え、不慮の死を遂げるまで時々家族をたずねていたようです。

（2）父方祖母：Dorothy Lynde Dix

1740年5月23日生まれのすらりとした背の高い「ウオーセスターのばら」と呼ばれていたDorothy LyndeはElijah Dixと1771年10月1日に結婚しました。Dorothyの家族は英国軍にマサチューセッツ州チャールストンが焼き払われた際に父親（Joseph Lynde）や家族と共にウオーセスターに引っ越してきました。Lynde家は裕福な農家で資産家でした。二人の結婚は、両家にとって有利なものであったようです。特にElijahは、この結婚によって一介の無名な内科・外科医から土地の資産家たちの仲間入りを果たすことができたのと、新しい事業活動とりわけ不動産投機の仕事に出会う機会を与えられることになりました。土地所有者たちは、仲間同士で売買取引をすることを好み、独立戦争開始頃には、ウオーセスターやマサチューセッツの土地の値段は上がり、街は好景気に沸いていたと言うことです（Gallaher, 1995）。そして、Elijah Dixはウオーセスターの義父の富を越えるほどの土地を所有するまでになりました。Dorothyは、当時の清教徒の女性の典型ともいえる人でした。それは、数世代にもわたるニューイングランドの清教徒的な躾の伝統から培われたものでしたが、厳格で威厳があり、堅苦しく情緒的な輝きや魅力を微塵も表に出さない人でした。このような女性が年を取ると、ますますこの傾向は顕著となります。Dorothyもご多分に漏れず、ディックス, D.L.に清潔、約束の時間に遅れないこと、行儀作法や裁縫や家事など女性として必要な仕事を完璧にこなすことを求め、祖母が満足するまで何度でもやり直しをさせました。

夫の急死によって、祖母Dorothyはディックス邸の主となるとともに、莫大な財産の管理をすることになりました。

ElijahとDorothyの間には7人の息子と一人の娘があり、三男のJosephが、ディックス, D.J.の父親でした。

（3）父親：Joseph Dix

彼は、Elijahの強い希望で1789年にハーバード大学に入学しましたが、兄たちとは異なり、大学を卒業することができませんでした。1800年12月（Gollaherによれば1801年1月28日）に貧しい家の年上の女性Mary Bigelowと結婚しました。両親は社会的に階層の違うこの結婚を快くは思わなかったようです。結婚した二人は、父親の所有地であるハンプデン（Hampden）のDixmontに住むことになりました。父親のElijahは彼の土地と農場の管理を息子のJosephに任せますが、彼は土地の管理も農業に従事することにも身が入らず、父親を失望させることになりました。父の急死は心理的にも経済的にもJoseph一家にとっておおきな打撃を与えます。彼は父の所有する土地の十分の一を遺産として貰い受けますが、経済的にはさらに苦しい生活をする羽目になりました。

1812年イギリスとの独立戦争の勃発とともに、イギリス海軍の侵攻を恐れて、ディックス, D.L.の家族は、バーモントのバーナードという寒村に引っ越します。大学を中退し、結婚したJosephは、家の宗教である会衆派教会主義（Congregationalist、イングランドに始まったプロテスタントの一派）から離れ、メソジスト派に移り、次第に信仰への傾斜を強め、宗教関係の書物を中心とした書籍の販売を始めます。また巡回牧師として、各地を転々と説教して回るようになりました。

また、彼が書いた説教を小冊子にまとめて売ることも始めますが、その製本作業と小冊子を道端で売ることは幼いディックス, D.L.の仕事になりました。巡回牧師としての仕事に熱を入れるようになると、住まいを転々と変え、アルコールに溺れ、さらに家族の生活は貧しいものになってゆきました。

Josephは、ひ弱で神経質なところがあり、やる気がなく無責任になる時期があったといわれています。ディックス, D.L.自身父親と

似た傾向があると感じて、身体的な病気を装っていたとブラウン（Brown, 1969）は述べています。

Josephは、1821年4月に亡くなりました。

（4）母親：Mary Bigelow Dix

1779年6月15日ソールスベリー生まれのこの女性は、Josephよりは年上で、夫のJosephよりも社会的にも低い階層の出でした。彼女の家は貧しかったのでJosephは意図的自虐的に自分より低い身分の女性と結婚することによって父親に反抗していたのかもしれないとも云われています。彼女の出自等について詳しい記録は殆ど残されていないようです。Josephとの間にDorothea、Joseph、とCharlesの三人を儲けますが、三番目の子供の出産後から絶えず身体の不調を訴え、家事はもちろん幼い弟たちの世話も十分にできない状態で、終日ベッドに横になっていることが多くなりました。夫の死後は、実家の親戚を頼って生活していましたが、1837年5月に亡くなりました。

２）　少女時代

（1）出生から12歳まで

1802年4月2日、Dorothea Lynde Dix（洗礼名Dorothy、祖母の名をもらう。しかし、この名前を使うことを大変嫌がった、といわれている）は、Joseph DixとMary Bigelow Dixの第一子として生まれました。

当時のマサチューセッツは開拓者達が入植に努力していた土地で、牧場と原野の広がる荒涼とした土地でした。冬は寒く、春になると道は泥濘となり、道路はなく水路を使っての往来が唯一の交通手段だったようです。また、どの入植者の家庭も約400㎡の土地に小屋を建て、農業と牧畜を営み、現金収入はなく、自分たちが作った作物との物々交換が主な生活の糧を得る手段でした（Coleman, 2007）。

ディックス, D.L.は、裕福な父方祖父が存命中の7歳までは、時々はボストンの祖父の豪壮な邸宅をたずね、見事な調度品で飾られた部屋で祖父の立志伝を聞いたり、ウオーセスターを祖父が訪れたときは、祖父と四輪馬車で祖父の所有地を疾駆したりと、貧しさの中にも楽しく明るい思い出のある時期を過ごしたようです。

しかし、7歳の時の祖父の急死で家族の生活は急変します。ディックス, D.L.の父親は祖父の財産の十分の一を相続したものの、その資産は減り、次第に貧困と放浪の生活をすることになります。その上、母親が病弱であったために、家事や育児、さらに父親の説教書の製本と販売の仕事すべてが、少女ディックス, D.L.の肩に重くのしかかってくることになりました。

彼女が小学校に通えたかは明らかではありません。例え通えたとしても、当時公教育はまだ十分に確立していなかったので、女子は男子と同等に学ぶ機会は与えられていませんでした。小学校に通うにしても、男子が農作業を手伝っている夏の間だけ教室を使って学ぶ、というものでした。女子は読み書きを習得することは期待されてはおらず、聖書を読めればよいとされ、字が書けることは求められず、多くは×印のサインができればよかったとされていました。

ディックス, D.L.は、大学中退の父親から読み書きを教わっていたと考えられますが、年頃の少女が当然身につけるべき行儀作法や身だしなみは躾けられていませんでした。

宗教に没頭してゆく父と病弱な母との生活は、開拓者としての生活の厳しさに加えて、体罰を与えられることはなくても養育放棄に等しい状態で、12歳の少女には過酷すぎる生活だったと思われます。愛情を求めようとしても、それに応えようとしない両親を憎らしいと思い、怒りを抱いたとしても無理からぬことだったとも考えられます。しかし、ディックス, D.L.は、自分の怒りや憎しみや不

満を表面には出さず、そのすべてを自分の心の中に抑え込み、従順さを装うすべを会得してゆきます。

(2) 家を出る

12歳、ディックス, D.L.は、家を出てウオーセスターから64キロ離れたボストンの父方祖母を一人で訪ねます。苦しく貧しい生活と家事・4歳年下の弟の世話などから逃れて祖母の庇護を求めた家出であったとも、両親がよりよい生活を願って彼女を祖母の元へ送ったのだとも言われますが真相は不明です。

広大なディックス邸に一人住んでいた68歳の祖母はディックス, D.L.を引き取り、良家の子女としての行儀作法と身だしなみ、従順さを厳しく躾け、一人前の女性にしようと努力します。しかし、それまで行儀作法など全く躾けられていなかった自立心の強い頑固なディックス, D.L.は、祖母の厳しさと強引さには我慢できませんでした。二人は互いに反目し理解しあえない関係になってゆきました。

助けと暖かい慰めと家事からの解放を夢見て祖母の家へ家出したはずでしたが、祖母から愛されていないと感じ、彼女は新しい試練に出会うこととなりました。

1815年（13歳）再びウオーセスターの両親のもとに送り返されることになったのですが、両親が伝道に出かけることになったために、ウオーセスターの祖母の妹のフィスケ（Sarah Lynde Fiske）家に預けられることになりました。

そこで初めて、ディックス, D.L.は同い年の子供たちと生活し、従兄弟・従姉妹たちやその友人たちと出会いました。従兄弟・従姉妹たちと友情を育み、家族団欒と交わりを経験し、知的な関心に興味を抱くようになったのです。特に28歳年上の法律家の従兄のバニング（Banning, E.）と親しくなり、芸術、宗教、文学について長時間会話を楽しむこともありました。周囲は二人は婚約しているなどと噂したこともありましたが、ディックス, D.L.はそのことについては一切語らず、真偽のほどはわかりません。従兄弟・従姉妹たちと交わりながら、いつしかディックス, D.L.は、祖母が求めていた行儀作法を身につけ、優雅な大人の女性に成長していったのでした。また、生涯の友ヒース, A.（Ann Heath）を得ることもできました。電話がなかった時代のことです。ディックス, D.L.はよく様々な人に沢山手紙を書きました。ヒース, A.は、ディックス, D.L.にとって、自分の心の悩みや苦しみを正直に告白し慰め、社会との懸け橋になってくれる唯一の友だちでした。ヒース, A.の死まで二人の文通が続きますが、1830年、母親の死を知らせるヒース, A.の手紙に対するディックス, D.L.の反応から、二人の関係には少し隔たりが生じます。母親の死に打ちのめされて悲しみに暮れるヒース, A.を慰める方法を知らなかったディックス, D.L.は、自分の苦しみを訴えることで相手を慰めようとします。しかしこれは失敗に終わります。

このことはなにを意味するのでしょうか？相手に愛情と慰めを求める手段や方法は、フィスケ家の生活や友人知人との交わりの中で経験を積んだものの、それにこたえる感情表現を学ぶ機会がなかったことを表しているのではないでしょうか。このことは、彼女の生涯を通して、彼女のやや一方的ともみられる行動パターンの特徴として残っていたのではないかと考えられます。

3）教師時代

(1) 女教師学校（Dame school）を開く－

14歳になった頃、ディックス, D.L.は幼児向けの学校（dame school）を始めることを考えました。金銭的にも自立する必要があったからです。当時、17歳から30歳までの未婚の女性が自立した生活をするには、召使になるか教師になって収入を得るかの方法しか

ありませんでした。10代で教師になることは大変稀なことでしたが、フィスケ（Fiske）家の叔母たちは、その仕事が彼女に適していると考えて、学校を開くことに賛成しました。ディックス, D.L.が開いたdame schoolは、女教師学校と呼ばれ、一人の婦人によって開設・経営された初等学校ないし私塾と呼ばれたものでした。

（http://en.wikipedia.org/wiki/Histor_of_education_in_the_United States
http://en.wikipedia.org/wiki/Dame_school）

この頃はまだ教師になるのに資格は必要ありませんでした。日本でも江戸時代末期には初歩的な教育が寺子屋で行われておりましたから、それを想像していただけると理解しやすいかと思います。若かった彼女は教室にいる時は、自分を精一杯大人っぽく見せようとして、長いスカートと長い袖の上着を着て、背筋をピンと伸ばして威厳のある態度をとっていたようです。

(2) ボストンの祖母の家に学校を開設、学問への興味強まる

学校経営は順調で、5年間フィスケ（Fiske）家の生活が続きましたが、1821年4月に父親のJosephが亡くなり、弟二人の面倒を見る必要が出てきて、さらに働く必要に迫られたのでボストンの祖母と同居することになりました。彼女の生徒の一人は、当時の彼女の教師ぶりを「すぐ顔を赤くしがちな先生でしたが、とても厳しい先生でした」と回想しています。男子生徒には彼女は鞭をよく使い、女子には鞭は使わなかったものの「とても悪い子です」と書いたプラカードをつけて街を歩かせたといいます。生徒は、「悪意があってしているのではなく、彼女の愛の鞭なのだ」と理解していたようです。この学校では、読み書き、行儀、習慣、裁縫、道徳、宗教などを教えていました（Coleman, 2007）。

17歳、さらにボストンに昼間と寄宿学校および貧しい子供のための学校を運営し、ボストンとウオーセスターを往復する忙しい生活をはじめました。

また、ハーバード大学卒の従兄のハリス（Haris, T.W.医師）からは、ハーバード大学の公開講座の聴講や図書館・市立図書館の利用方法なども教わり、彼を通して彼女の学問に対する興味は天文学、植物学、地質学などの自然科学にも広がり、教えつつ学ぶ、読書と学問好きな女性となってゆきました。（Gallaher, 1995）。

1824年（22歳）には、教育改革者でもあるホウ（Fowle, W.B.）の経営するNew Boston Monitorial Schoolの裁縫教師になりました。ホウ（Fowle, W.B.）は、黒板を使ったり、教師を補佐する助教制度を導入したりする有名な教育改革者の一人でした。

この頃、ディックス, D.L.は、教師であることは、「孤独を解決する一つの方法であり、これまでに得られなかった幸せをえる道である」ととらえ、「教えることは、自らを高める刺激的な仕事である」「自己を向上させる手段であり、人々を助ける方法である」と教師を天職と考えていたようです。（Schleicher, 1992）。

1824年（22歳）には、彼女が教師として経験した生徒の質問から日常生活に関連する疑問300項目を取り上げて、母が子にその疑問に答える対話形式の小百科事典（Conversation on Common Things）を匿名で出版しました。この本は、40年間に60刷を重ね、この印税は後々まで彼女の収入源の一つとなってゆきました。

1827年から29年にかけて、体調不良にも拘らず、Compendium of Flowersを含む4冊の本を執筆しました。

(3) ２回の発病

ディックス, D.L.には、1826年、1836年に抑うつ状態が疑われる心身の不調に苦しむ時期がみられます。

1826年、喀血を伴う体調不良におちいり

（結核ともいわれる）、教師を続けることが困難になって、自身が開設した学校を閉鎖します。ただ、New Boston Monitorial Schoolの裁縫教師だけは続けていたようです。

ブラウン, J.B.（1969）は、この状態を抑うつ状態としていますが、詳細は不明です。この状態の彼女に救いの手を差し伸べたのが、神学者・牧師のチャニング（Channing, W. E.）でした（http://en.wikipedia.org/wiki/William_Ellery_Channing）。

チャニング, W.E.はカルヴァン主義から離れ、ユニテリアン派の指導者となって、ボストンの教会で毎日曜にミサを行っていました。この日曜礼拝にディックス, D.L.が参加し、チャニング牧師の「良きこと・慈悲深さ」などについて語る説教に感動して、毎日曜の礼拝に通い、彼と知り合うようになりました。

彼は、1827年の夏の間だけ娘の家庭教師としてディックス, D.L.を雇い、ロードアイランドのポーツマスに滞在させます。3年後チャニング, W.E.は、カリブ海のサンクロワ島の家族旅行にもディックス, D.L.を誘います。彼女はチャニング, W.E.の優しさの中に父親的なものを期待したようですが、家族の一員にはなれないことを次第に悟ります。1831年、彼女は健康を取り戻してボストンに戻り、学校を再開しました（Muckenhoupt, 2003; Coleman, 2007）。

1836年、再び喀血と過労から抑うつ状態になります。チャニング, W.E.や主治医らは、ヨーロッパでの療養が望ましいと考え、チャニング, W.E.の友人であるリバプールのラスボーン, W.Ⅲ世家を紹介します。1836年4月リバプールに到着。ラスボーン, W.Ⅲ世の息子ウィリアムは当時の彼女を「とても穏やかでロマンチックな感傷的な若い女性でしたが、精神的エネルギーの乏しい、弱々しさがあった」と語っていました（Coleman, 2007）。18か月の療養生活で、健康は回復します。

ラスボーン, W.Ⅲ世は裕福な商人でしたが、また知的エリートとの交流も多く、さまざまな人々がこの屋敷を訪れていました。これらの人々との交流の中で、彼女は多くの知識を学び、啓発されていきました。ラスボーン, W.Ⅲ世家の生活の方がフィスケ家での生活よりも受け入れられている、という寛いだ気持ちを彼女は感じたようです。

ラスボーン家に滞在した18か月の間に、母のMary Bigelow Dixが1837年の4月、祖母のDorothy Lynde Dixが1838年4月に亡くなったとの知らせを受けます。

健康が回復した1838年8月、アメリカへ戻りました。

4）知的エリートたちとの交流

ボストンでのフィスケ家の従兄弟・従姉妹たちやチャニング, W.E.牧師を介した知的エリートとの交流に加えて、ディックス, D.L.はリバプールでのラスボーン家でも人々との間にも豊かな知的交流をえることができました。例えば、ウエッジウッド, J.（Josia Wedgewood）ロスコウ, W.（William Roscoe、生物学者）、フライ, E.（Elizabeth Fly、刑務所改革運動家）、チューク, S.（Samuel Tuke、ヨーク救護所経営者）などです。

特にディックス, D.L.の関心を引いたのは、チューク, S.でした。彼は、チューク, W.の孫に当たり、祖父がラスボーン, W.Ⅰ世と親交があった関係で、代々子供たち同志も親交があったのです。チューク, W.は、ピネル, P.の精神障害者の人道的処遇の考えをもとに、イギリスで、精神障害者のために、船が厳しい航海から戻って休息する港のような、精神障害者にとって休息と憩いのある場所としてヨーク救護所（York Retreat）を作った人です。チューク, S.はその孫に当たりますが、ディックス, D.L.がその考えに感銘を受けたことが後の彼女の活動にくしくも影響を与えていたのではないかと考えることもできます。

ナイチンゲール, F.が、ミルンズ（Milnes,

R.M., 1805-85瞑想的な詩人）や哲学や宗教思想にも造詣の深いブンゼン男爵（Baron von Bunsen, Charles Josias, 1791-1860、 プロシアの英国王室特使）と知り合うことによって、多くの思想家の書物を読みその思想を吸収して、彼女の思想形成と看護への情熱を深めていった（徳永哲, 2011）のと同じく、ディックス, D.L.もまた、彼女の周囲の知的エリートとの交流を深めながら知識を獲得し、ライフワークへの基礎となる考えを作っていったのではないかと考えられます。

５）「私には子供時代がなかった」

ここまで読み進んでこられた読者は、なぜディックス, D.L.が自伝を書くことを拒み続け、また死後伝記を書かれること避けたのかの第二の理由がお分かりになったのではないでしょうか。

ディックス, D.J.は、生前自分の生い立ちについて聞かれると「私には子供時代がなかった」「私は孤児でした」「私は世界中でたった一人です」などと答えていたことを、伝記作者は書いています。そして、幼児期についてそれ以上語ることはありませんでした。また、父親の名を１回だけ書いただけという父母の存在を否定していることは、かなり極端で、勇気のいることではないでしょうか。父母の養育放棄の状態に対して、両親を否定し、過去を否定することによって、両親に対する強い怒り、恨みを表現し、この怒りと恨みをずっと心の中に持ち続けていたからこそ、彼女の上述のような発言があったのではと考えられます。

彼女は、幼いころの父母や祖母から得られなかった愛情欲求をヒース, A.の母親的な友情によって一部は満たされ、また、父親のような男性によって満たされたことがあったとしても、この欲求を他者への奉仕（精神障害者の権利擁護と処遇改善）を生涯続けることによって埋め合わせていたのではないでしょうか（Brown, 1969）。

６）新しい方向を求めて

弟たちも独立し、母や祖母の死によって、世話を必要とする対象はなくなりました。残された遺産と教師で得た蓄えと印税収入とで、年収は当時のお金で3,000ドル程になり、今までのように生活のために働く必要はなくなりました。日曜学校の教師は続けていたものの、彼女の心は何故か満たされませんでした。

1837年から1839年にかけてニューイングランドから大西洋沿岸、バージニアの南部まで旅行し、学校、孤児院、刑務所、私立貧民院、精神病院などを見学して回ります。自分はこれから何をしたいのか、暗中模索の日々が続きました。

1841年3月28日のことでした。

ハーバード大学神学部学生のニコル, J.T.G.がディックス, D.L.を訪ねてきます。用件は、女子刑務所の日曜学校の女性の先生を紹介して欲しい、というものでした。彼は自分が教えている女子刑務所の日曜学校には女性の教師が良いのではないかと考え母親に相談したところ、母親がディックス, D.L.を訪ねるよう助言したのでした。しかし、ディックス, D.L.は人を紹介する代りに即座に「私がやりましょう」と答え、翌週の日曜日にその刑務所をたずねることにしました。

そこで、ディックス, D.L.が目撃したものは、何だったのでしょうか。彼女は、そこで自分が果たすべき新しい目標を見つけたのです。以後のディックス, D.L.の活躍については、次稿で述べることとします。

文献

Brown,T.J. (1998). Dorothea Lynde Dix New England Reformar,Harvard

Unibercity Press, 1-79.
Brown,W.J. (1969). A Psychiatric Study of the Life and Work Dorothea Lynde Dix. Amer. J. Psychiat., 126(3), 335-341.
Colman, P. (1992). Breaking the Chains The Crusade Dorothea Lynde Dix, NY, ASJA Press, 11-36.
Gallaher, D. (1995). Voice For The Mad, The Life of Dorothea Dix. The Free Press, i-xi, 1-127.
Muckenhoupt, M. (2003). Dorothea Lynde Dix Adovocate for Mental Health Care. Oxford University Press, 8-39.
Scheichert, M.S. Illustrated by Antonio Castro (1992). The Life of Dorothea Dix. Twenty-First Century Books. 13-46.
Tiffany, F. (1891). Life of Dorothea Lynde Dix. Boston and NY, Houghton Mifflin and Company.
Wilson, D.C. (1975). Stranger and Traveler The Story of Dorothea Lynde Dix. Little Brown and Company. 3-91.
逸見武光 (1976). Ⅺ　精神保健 2. ドロシア・リンデ・ディクス, 船川幡夫, 橋本正己編, 新公衆衛生学. 269-274, 東京：第一出版.
スチュアート・ホルブルック (1955). 狂人病院の天使. リーダース・ダイジェスト, 8, 102-106.
浦野シマ (1975). 精神病院改革の偉大なる女性　ドロシア・ディックスを想う. 看護, 27(8), 97-101.
冷泉　某 (1932), 精神衛生運動の前行舎 ドロテア・リンド・ディックス女史を懐う, 脳6(1), 1-3.
齋藤玉男 (1928), 精神衛生運動の回顧と翹望. 脳2(11), 1-3.
鈴木芳次 (1956). 続・精神病院給食史考―明治精神病院の淵源―ドロテア・ディックスと森有礼. 臨床栄養, 3, 41-43.
徳永　哲 (2011). 1840-50年代におけるナイチンゲールの看護哲学と近代看護の形成. 日本赤十字九州国際看護大学紀要, 10, 61-72.
Dame school, 2012/11/22, http://en.wikipedia.org/wiki/Dame school
Dixmont State Hospital, http://www.dixmontstatehospital.com/
History of education in the United States. 2012/11/21, http://en.wikipedia.org/wiki/History of education in the United States.
William Ellery Channing, 2012/12/20, http://en.wikipedia.org/wiki/William Ellery Channing

表１　ディックス, D.L.　年表

暦年	年齢(歳)	おもな出来事
1802. 4. 2.		ハンプデン、メインで生まれる
1806		バーモントで弟Josephうまれる
1809	7	父方祖父Elijah Dix急死
1812		弟Charles Wesley生まれる
1814	12	家を出て父方祖母のもとへ
1815	13	マサチューセッツ、ウオーセスターで伯母（父方祖母の妹）従兄弟・従姉妹たちと暮らす。初めて同年の子供たちと交わる経験をする。Ann Heathと友達となる
1816	14	dame school開設
1819	17	ボストン、オレンジコートの父方祖母と暮らす
1821	19	昼間と寄宿学校を祖母の家で開く。同時に貧しい子供たちのための慈善学校を開く
		父Joseph没
1824	22	子供のための小百科“Conversations on Common Things”を出版
1826	24	喀血と過労で倒れ、学校を閉じる
1827-29		草花概説（“Compendium of Flowers”）を含む4冊の本を出版
1830	28	Channing, W. Ellery家の子供たちの家庭教師としてサンクロワ島へ旅行
1831	29	オレンジコートの祖母の家で昼間と寄宿学校を閉じる
		療養のためイギリスへ。リバプールのラスボーン（Rathbones）家に滞在。
1836-37	34-35	ラスボーン（Rathbones）家での療養の結果、健康が回復。
1837. 4. 29.	35	母Mary Bigelow Dix没
1838. 4. 2.	36	父方祖母Dorothy Lynde Dix没
1838. 8.		アメリカへ戻る
1839		ボストンのSarah Gibbs家に移る
1841. 3. 28.	38	ハーバード大学神学部学生ニコル, J.T.G.がイーストケンブリッジミドルセックス郡女子矯正施設で日曜学校の教師を紹介してほしいと來訪。ディックス自身次の日曜に矯正施設を訪問、貧しい精神障害者が収容されているのに愕然とする
1842		マサチューセッツの貧しい精神障害者施設を訪問し、状況を調べる
1843. 1. 19.	42	マサチューセッツ州議会に建白書を提出
		ノヴァスコシア・ニューヨークにおける精神障害者施設処遇について調査を開始
1844	42	ロードアイランドにおいて精神障害者の取り扱いが悪いことを公表
1845	43	ニュージャージーおよびペンシルバニア州議会に書簡を送る
1845-46	43-44	テネシー、ケンタッキー、オハイオ、メリランドで精神障害者の処遇改善キャンペーンを展開

表1　ディックス, D.L.　年表（つづき）

暦年	年齢(歳)	おもな出来事
1846-47	44-45	南部―ルイジアナ、アラバマ、ジョージア、南カロライナ、ミシシッピ、アーカンソーなどで精神障害者の処遇改革運動に乗り出す
1848. 6. 27.	46	各州の貧しい精神障害者のケア施設設置のために5,000,000エーカーの土地購入予算案をアメリカ議会に提出
1849	47	アラバマ、ミシシッピ、ルイジアナ、オハイオ、ノースカロライナへ改革キャンペーン運動を行う
1850	48	12,115,000エーカーの土地購入予算案が下院で可決、上院に送付される
1851	49	土地購入予算案は上院を通過、下院で延期される
1853-56		クリミア戦争
1853	51	ノバスコシアとセーブル島へ旅行
1854. 5. 3.	52	土地購入予算は上下院を通過、ピアス（Pierce, F.）14代.大統領がディックス, D.L.の土地購入予算案を拒否
1854. 11.		英国のリバプールへ渡る
1855. 2.	53	スコットランドとチャンネル諸島に改革運動に行く
1856	54	イタリアへ、法王ピウス9世に謁見、ローマにおける精神障害者取り扱いの改善の仲介を依頼
		ギリシャ、トルコ、オーストリア・ハンガリー、ドイツ、ロシア、スカンジナビア諸国を旅行
		アメリカへ帰国
1857	55	精神障害者の人道的処遇運動を再開
1861-65	59	南北戦争
1861. 4. 22. -1865		南北戦争の間、陸軍女子看護婦総監として働く
1865-1868		イギリス・ヨーロッパへ旅行
1867	65	兵士の記念碑建立の募金活動
		精神障害者の処遇改善運動再開
1869	67	カリフォルニアへ旅行
1875	73	すべての精神病院に郵便受けを設置することで、パッカード, E.と対立
		森有礼からディックス, D.L.への書簡
1878	76	2月弟Joseph、4月 Anne Heath没
1881	79	引退
1881. 10. 1.	79	南部へ最後の旅行。体調を崩して州立トレントン精神病院へ
1887. 6. 18.	85	ニュージャジー州立トレントン精神病院内のアパートの自室で死去、85歳
1987		ディックス, D.L.の死後100年を記念して、彼女の記念切手発行される
2005		APA（American Psychiatric Association, アメリカ精神医学会）は、先駆的な改革運動を行った功績に対して故人に与えられる特別会員（Posthumous Fellowship）の称号を贈る

（Muckenhoupt, M.（2003）などを参考に著者作成）